

寺報 善 巧

発行
〒938-0862 富山県
下新川郡宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
TEL (0765) 65-0055
FAX (0765) 65-0975
メール zengyou@p2342.nsk.ne.jp

賀 春
元旦や
今日のいのちに
遇う不思議

寺
こよみ
一月

一日 修正会
三日 日校かるた会
四日 栗虫報恩講
五日 雪ん子劇団稽古始
七日 花の会新年会
一日 一 正忌用米とき
二日 二 正忌お華束準備
三日 成人式

御正忌

一三日 一時 お逮夜
一四日 一時 お逮夜
一五日 十一時 下村お講
一時 お逮夜
一六日 十一時 浦山・枋
屋・熊野・大橋お講
一時 ご満座
講師 三寄霊証先生



雪のご正忌

“安らかなれ”との期待を背負ってスタートした新世紀は、世界的な混迷のなかでその初年を閉じた。長びく争乱の序曲か。今、一人ひとりが自らの生き方の再確認を迫られているのではなからうか。

親鸞聖人が「和国の教主」と仰がれた聖徳太子は「十七条憲法」の冒頭に「和を以て貴と為す」と述べられた。

「和国」の響きに太子の切なる願いが感ぜられる。その和を實現する道を「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり。三宝に帰りまつらずば、何を以て枉れるを直さんと示されている。

永遠の真理を覚られた仏陀（ブッダ）、その仏陀が人びとを導かれる教法（ダルマ）、その教法に依り自らの人生をもって、教えの真実なるを証しせんとする修行者の和やかな集いである僧伽（サンガ）、これらを三宝といい、これを宝と

篤く三宝を敬え

仰ぐ者を仏教徒という。宝とは、元来それを持つ者に安らかな幸せをもたらすもののことである。もし、それをめぐって争いや憎しみが生ずるならば、それは宝と名づくべきものではない。私たちは何を宝としているだろうか。多くは宝といえないものを宝と誤って、かえって真の宝を失っているのではないだろうか。

また、「帰依」（依る）とは、脆弱な依存主義でなく、人間の最も尊厳な生き方をあらわす言葉というべきである。何故なら、我執に対して無批判に生きようとする人間が、自らを超えた真実を価値判断の基準として思考し、行動し、発言することである。そこには厳しさの中に生じる、崇高な喜びと深い慚愧がある。それが人をして輝かしくしてゆくからである。

行信教教授

天岸淨圓先生



空華忌講話

(平成十二年)

本願寺派勸学

梯實圓和上 (三)

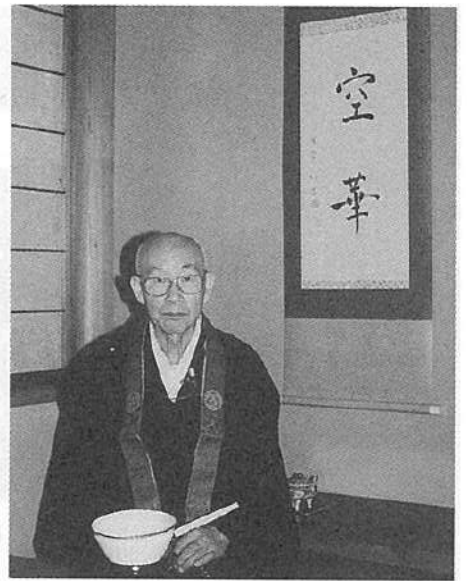
知ってるつもり、というテレビ番組がありますね。分かったつもりで分かっていないことが多いのですが、実はね、普通一般に考えられている「自力・他力」というのは、真宗の「自力・他力」でないのです。浄土宗と言ってもいろいろあるんですよ。鎮西浄土宗は今の京都で言いますと知恩院さんを総本山としているものです。東京で言いますと芝の増上寺がそれに属している。もう一つ西山浄土宗というのがある。これは全く違った系統です。法然聖人のお弟子には違いないんだけど、法然聖人のお弟子の中

で親鸞聖人の系統は浄土真宗ですね。聖光房弁阿上人という方の系統が鎮西浄土宗、それから善恵房証空上人という方の系統が西山浄土宗というんです。この西山浄土宗と浄土真宗では、「自力を捨てて他力に帰する」と言います。けれども鎮西浄土宗では「自力を捨てて他力に帰する」のではなくて、「自力の足りない所を他力が補ってくださるんだ」という形の他力を考えるわけですね。これは実を言いますと曇鸞大師以前にあつた考え方ですね。例えば『十地経論』であるとか『菩薩持地経』であるとかというような論に出ておつた考え方は、もともとそのようなものでした。鎮西浄土宗の考え方、これはよく分かるんです。「自力」

というのは自分の力で一生懸命つとめ励むことだ、とこう考えますね。だからこれはいいことですね。悪いことを励むんじゃないですよ。いいことをつとめ励むことを「自力」の修行とこういいます。それに対して「他力」というのは、他の力といえます。自分の力じゃない、他の人の力ですが、それが自力の修行に加わることによって救いというものがあるいは悟りというもの、そういうものを一般的に自力と他力と考えるんです。だから自分の力と他人の力ですね。これはよく分かれますね、この考え方は。分かるから危ない。(笑)この鎮西浄土宗の派祖というのは今申しました聖光房弁阿という方なんです。この人は九州の方でございまして、鎮西というんです。この人の弟子に然阿良忠というすごい学者が出るんです。浄土宗では法然聖人を元祖といたしまして、この

二人を加えて浄土三祖と呼んでるんです。この三人によつて浄土宗の教学は確立したといわれているのでございします。その弁阿上人あるいはその後を継ぎました良忠上人は、自力というのは結果をもたらす因なんだ、そして他力というのは縁なんだ、自分で努力することが因であり、そしてそれが自分の力だけでない、他のいろんな方々のお力添えによつて、物事が完成していく。つまり結果というものがでてくる。結果はこれは聖道門でいえば「悟り」というものだし、浄土門でいえば「救い」でございします。「往生」でもいい、浄土に往生するということですね。広い意味で「救い」としておきます。こういうふうに考えているわけです。仏教の道理というのは因と縁が和合して結果がでる、これが仏教のものの考え方だ。一つの因だけで結果がでるわけがない。一つの結果がでるといふことは、原因も

必要だけれども、その原因を助けて結果を生来するよいうなんんな縁がありますね。豆の種があつただけで、豆が出来るわけじゃないでしょ。その豆はここに置いておいたってどうしようもないですね。土の中に埋めて、そして適当な水分とそして温度が加えられて芽が出てくる。そして肥料を加えることによってだんだんと成長していくんですね。だから種だけでは芽は出てきません。いろんな縁があつて初めて種から芽がでるわけですから、因だけでは結果はでてこない。そこで因と縁とが和合して結果がでてくる。つまり「自力」プラス「他力」イコール「救い」という実に簡単な方程式ですね、これは誰でも分かる。こういう方程式を考えるわけですね。ただしこれは聖道門だと浄土門だとか関係なしに仏教はすべて因果の道理によつて成り立っているのだから、「因」プラス「縁」イコール「結



果」というのはもう仏教全体
の道理なんだとこういう
わけです。ただし、教えの
中では自力の要素が非常に
強い教えと、他力の要素が
非常に強調される教えとが
ある。つまり自力が非常に
強い、これを自強といいま
す。それに対して他力の要
素はどちらかといったら軽
くて弱い、他弱ですね。こ
ういう形で語られる教えが、
これが自力聖道門といわれ
るんだ。自力の教えといっ
たって自分の力だけで悟り
なんか開けるわけがない。
修行する人は誰でもそうで
すね。だって仏教の修行者
というのは自分で生産活動

いた食事を頂戴してそれで
命を継いでいくわけですよ。
そしてまた修行しようとし
たら、先生が要る。こうし
なさい、ああしなさい、こ
んなことしたらいかん、こ
うしなくちやいかんといっ
て導いてくれる先生がいな
きゃならんですね。自分だ
けで修行なんてできるわけ
がない。だからそういう自
分を経済的に支援してくれ
たり、あるいは指導してく
れる人たちが、いろんな方々
のおかげがあつて修行がで
きるわけなんです。実際に
厳しい修行をする人はね、
私は仏さまの加被力によつ
て、如来さまのお力添えに

するわけ
じゃないん
だから、や
はり食わし
てもらわな
くちやなら
ん。托鉢に
行つてそし
て残り物を
いただいて、
そのいただ

よつて、菩薩さまのお力添
えによつてこの修行とい
うのはできたんだ、と皆い
ますよ。俺の力で悟りを開
いたなんていう人は一人も
いやしません。聖道門の人
だつてね、そりや自分で一
生懸命やりますよ、命懸け
になつてやりますよ。だけ
ど、だからといってそれだ
けで修行が完成するもんじ
やない。だから比叡山に登
っている方々、あるいは永平
寺に入っているお坊さんに
したつて厳しい修行をして
いらつしやいますけれども、
厳しい自力の修行だけで悟
りを開けるなんて皆いつて
やしません。例えば比叡山
で、もう終わつてゐるだろ
うと思いますが、回峰行をや
りまして、その中で一度九
日間の断食・断水・不眠・
断塩という恐ろしい行をや
りますね。九日間お堂の中
に籠もつてね。ご飯ひとつ
ぶも、水一滴も飲まないん
ですよ。そして寝ないん
です。九日間。いや寝る暇な
いんです。十万枚の護摩を焚

くんです。もうもうと、炎
が燃えてる中で十万枚の護
摩を焚きながら、そこで真
言を称え、あるいは般若心
経をあげながらやつていく
んですね。寝てる暇なんて
ありません、十万枚焚くん
だから。そして塩を一なめ
もしない。ただし喉が乾く
でしょ。だからうがいをす
るが、飲んだらいかんので
す。水は毎日介添えの人が
換えてくれます。減るんじ
やなくて増えるそうです。で
もね、医学的に見たらとつ
ても生きて帰れるような行
じゃないんだけど、死んだ
人ないですよ、今まで。無
動寺の堂籠りをやつて死ん
だ人はない。お堂から出
きた時は私の力で完成した
んじゃない、あそこでは不
動明王の前でやりますから
ね、みんなお不動さんのお
かげでございまして、あ
あいう人たちはみんな自分
の守り本尊を持つてますか
ら、そのご本尊さんのおか
げでございまして、皆おつ
しやつてますよ。私の力じや

ありませんとこういいま
すけどね、しかしやるのは本
人の命懸けの修行によつて
やるわけです。だからお堂
の中に入る時には自分の持
ち物全部人にやつてしまつ
てね、形見分けを先にして
しまふ。先に葬式をすまし
て、お堂の中に入るんです。
それが修行者ですね。そう
いうふうにして修行をする
んです。行者さんというの
はやつぱりええ顔してます
ね。やつぱりあか抜けしま
すな。わしらみたいな俗っ
ぱい顔してません。もつと
もね、半年程経つたら元
に戻っている。(笑)しかし
これは強烈な自力の修行で
す。しかしそれだけではな
い多くの方々の、また目
には見えない仏さまや菩薩
さまのおかげによつてこの修
行がさしていただけたと皆
いうてゐるんです。「自力」
プラス「他力」イコール
「救い」なんです、その
自力の要素が強い、他力の
要素が弱い、これを聖道門
というんだ。(つづく)

空 華 忌

十一月四、五日明教院僧
鎔師の空華忌が営まれまし
た。ご講師は高田慈昭先生
にお越し頂きました。心に

しみるご法話を頂き、総代
さんたちもつと聞きたい
とお話の余韻に浸っていま
した。(写真―高田先生と)

11 / 4 ~ 5



報 恩 講

10 / 19 ~ 20

例年通り十月十九、二十
日の二日間勤修され、ご満
座のお勤めの後、元総代三
人に長年のご尽力に対して
感謝状と記念品が贈呈され
ました。

浦山 沢田 最一さん
浦山 野島 重一さん
板屋 嶋田 久一さん



沢田最一さん



野島重一さん

年頭のご挨拶

責任役員

野畑 一雄

新年明けましておめでと
うございます。善巧寺責任
役員をお受けして一年にな
ろうとしております。その
間各総代さん方のご協力を
頂きながら務めさせて頂い
て居ります。私自身お寺の
行事には出来るだけお参り
させて頂き、多くの門徒の
方々とお会いして、私達の
寺・善巧寺をどう護ってい
くかなど、話し合っていき
たいと思います。皆様のご



意見をお聞かせ下さい。住
職とも相談しながらより多
くの方にお参り頂ける寺に
なるよう、一生懸命努めて
いく所存です。どうか、ご
協力のほどよろしくお願い
致します。

(責任役員 所属寺院の事
務の決定に加わる外、代表
役員(住職)を補佐して、
寺門の護持発展に努めるも
のとする…寺則より)

お道具磨き

今年は磨き粉から液体に
かえてみました



仏教婦人会だより



再出発してはじめての総会が十二月一日午後一時から開催されました。

現・旧・新役員の献灯献花、坊守三人調声の勤行。続いて仏教婦人会綱領を唱和した後、沢田みさを会長が熱い心で挨拶をしました。会場を門徒会館に移して、

念仏物語アニメビデオ「恵信尼さま」を鑑賞。記念講演は、国府教区仏教婦人会連盟会長・井上皋子先生の

「恵信尼さまのみあとをいたいて」。仏教婦人会の現状と大切さをご自身の体験からお話くださいました。

また、国府教区仏婦の恵信尼様顕彰の活動の様子や、『恵信尼文書』から恵信尼



井上皋子先生

様のお人柄などを丁寧にお話くださり、『恵信尼様』のお名前さえ知らなかった人も、「ご廟「こぶしの里」へ是非お参りしたい」と『恵信尼様』を親しく感じました。

総会は、野畑みのりさんの進行で、十二、十三年度の行事報告と会計報告、会計監査報告をして承認。次に新役員に交代して、新会長の中林昌子さんの進行で、十四年度の行事計画、会計予算を承認しました。

新役員は二月一日浦山お講・二月十六日下立お講の方々です。どうぞよろしく。総会に参加の地域：栗虫・下立・愛本・愛本新・下立・浦山六・七・八・九・十区・栃屋・大橋・下村・浦山新・上野・三日市・栃沢・石田・大橋は五軒中三人、栃屋は六軒中三人と五十%以上の参加率でした。



*また、門徒以外の方の参加も大歓迎です。
(十四年度の行事計画は四月の寺報に掲載します)

新役員紹介 (敬称略)



会長
中林 昌子
(下立)



副会長
橋 照子
(浦山)



副会長兼書記
野島よしえ
(浦山)



会計
岩崎 政子
(浦山)



会計監査
中林 絹子
(下立)

遠きより

白鳥の翔び来て

冬の池

喜子

寺
こよみ

二月

一日 浦山お講

六日 三日市報恩講

一三日 生地・荻生報恩講

一四日 下立お講

一六日 第五回カラオケ
一七日 十七夜聞法会

一八日 下立報恩講

一九日 入善・泊報恩講

二〇日 舟見報恩講

二六日 熊野報恩講

二七日 栃屋報恩講

二八日

寺
こよみ

三月

一日 浦山お講

四日 浦山報恩講

一三日 栃沢お講

一六日 十七夜聞法会

一七日 総代会(仏婦・聞法会等も含む)

二二日 雪ん子劇団
二四日 春の定期公演

11・9)川瀬勇作(11・28)丸
田耕一(12・22)野田利雄(母
12・25)佐々木隆一(母12・25)

三十三回忌 (昭和四十五年往生)

福沢五郎作(母1・23)尾沢
初雄(母1・23)佐々木与左
工門(母1・26)橋場年治(1・
29)板川広作(2・1)岡田嘉
太郎(母2・11)柝沢征太郎
(2・22)沢田正(長男3・3)
丸田助(3・28)藤沢善作(3・
31)朝倉輝雄(母3・31)川内
竹次郎(妻4・13)川内弘之
(4・13)野鳥敏之(6・10)谷
口健二郎(7・6)大藪忠一
(母7・15)谷口清右工門(孫
7・24)佐々木盛二(妻8・10)
開沢豊二(8・31)橋爪勇吉
(9・22)鬼原米作(10・7)柝
沢清次郎(10・7)橋場東作
(妻10・29)本波喜太郎(11・
5)根塚幸作(11・27)河村鉄
造(11・28)川原栄作(11・29)
佐々木作松(妻12・4)佐々
木市太郎(妻12・7)中坂一
郎(二男12・10)鬼原治男(妹
12・16)鬼原勝次(妻12・17)
丸田力(母12・30)

五十回忌 (昭和二十八年往生)

川口力次郎(妻1・13)沢田
峰吉(1・29)谷口健二郎(母
1・27)高島彦助(母2・3)
佐々木安兵衛(2・5)大島
幸助(2・7)沢田喜作(2・
20)野畑市右工門(母3・5)
鬼原秋義(4・1)山本秀雄
(長男4・3)佐々木菊正(弟
4・6)板川幸作(4・20)松
平伊次郎(母4・27)開沢梅
作(5・12)川内善七(母5・
21)岩上貞夫(三男5・30)丸
田力(長男6・2)浦田甚作
(兄6・18)山根浅二(長女7・
10)佐々木勝次郎(7・17)浦
山久次(母7・18)佐々木甚
八(7・31)岡田良作(8・9)
本波貫一(母9・19)島田周
一(長男9・25)開沢庄作(三
女10・1)熊野吉次郎(10・7)
岩上貞夫(二男10・10)中村
市(妻10・15)尾沢次郎左工
門(10・18)佐々木清六(妻10・
20)佐々木与助(11・1)尾村
豊(長男11・12)本波源吾(母
11・16)岡田長作(長男12・11)
高松義哲(12・30)

うれしいご縁続々と

10/10

十月十日朝、雨の中を、
稲城・日野両和上と学生さ
んたちがお立寄り下さいま
した。明教院僧鎔師のご縁
です。空華殿で空華門弟帖
や空華塾則等を見ていただ
きました。

十時過ぎちょうど入れ替
わるように、鳥取の源左さ
んのお寺願正寺さんご一行
が大型バス一台でお越し。
釈隆弘や坊守がお伺いした
こともあり、再会を喜び合
いました。



「正忌報恩講」



ご講師（十五日・十六日）
本願寺派布教使
福井西宮寺住職
三寄 霊証先生

一月十三日	一時	お逮夜
十四日	一時	お逮夜
十五日	十一時	下村お講
十五日	一時	お逮夜
十五日	夜七時	お初夜
十六日	十一時	浦山・栃屋・熊野・大橋お講
十六日	一時	ご満座

第五回カラオケ

二月十七日正午

場所 善巧寺門徒会館ホール
会費 ・ 男性千円 ・ 女性五百円
（飲み物・おつまみ代）

申し込み 地区総代さん、又はお寺へ
二月十五日まで

お寺からプレゼント

誕生、成人、結婚、入院など、お寺からお祝いやお見舞いをしています。お知らせ下さい。



成人祝



お誕生祝



お見舞



結婚祝

雪ん子劇団

定期公演

三月二十四日

『お寺座Ⅰ』 午後五時

入場無料

十一人の卒業生を送ります
どうぞおこし下さい



合 掌

昨年の主なできごと

一月 神子周太郎君誕生
三月 黒西組仏婦十周年
教化部営繕部設立

雪ん子鳥取へ

四月 住職勤式研究所へ

七月 寺報「善巧」百号

空華殿屋根緊急修繕

八月 雪ん子広島へ

十二月 仏婦総会開く

新しいのちの誕生は本
当にうれしいものです。赤
ちゃんのいる家庭には微笑
みがたえません。高島家に
もうすぐ第三子が。

住職は、年末年始連日ご
本山の出勤で忙しくしてい
ます。新年のメッセーじも
届けられず、「ご本山にお
参り下さい お待ちしてい
ます」とだけで精一杯でし
た。

